

「金の卵を産む鷺鳥」の飼主

東京大学大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻比較文学比較文化コース

李 澤珍

ある人が、毎日一個ずつ金の卵を産む鷺鳥を飼っていた。その飼主は、鷺鳥の腹の中に大きな金の塊があるのだと考え、その腹を切り裂いた。が、中は他の鷺鳥たちと同じであった。

余りにも有名で多くを語る必要はないだろうが、この話は古代から伝わるイソップ寓話中の一篇である。紀元前六世紀頃のアイソーポス、英語読みのイソップという人によって語られたとされるイソップ寓話は、主として動物を主人公とする短い物語と、それに添える教訓・啓蒙的な言辞から構成されるのが一般的である。

後世のイソップ寓話編訳者および再録者たちは、この「金の卵を産む鷺鳥」の話について「今もっているものに満足し、むやみに欲張ってはならない」という趣旨の教訓を伝えるものと捉え、欲望に耐えきれず鷺鳥の腹を切り裂いた飼主の行動を愚かなものとする評言を付しているのがほとんどである。三世紀頃のバブリウス版から、現代日本でも最も広く読まれているシャンブリ版にいたるまで、欲望への戒めの伝統は忠実に受け継がれてきたのである。すなわち、金の卵を産む鷺鳥の飼主は二千年近くも世のそしりをまぬかれることができなかったといえよう。

なるほど、確かにこの話の展開から見ると、飼主を擁護する余地はなさそうだ。しかし、もしも鷺鳥の腹を切り裂いて原作の寓話とは異なる結果が出たらどうだろうか。仮定の話だが、飼主の思った通りに金の塊も出てきたとしたら、あるいはせめて金の卵を産む仕掛けが見つかったとしたら…。いやいや、鷺鳥の腹から金の塊が出るなんて常識的にとうてい考えられない、と仮定の前提そのものが否定されるかもしれない。しかし、そう言い切れるだけの十分な科学的な根拠はあるのだろうか。

もし金の卵を産む鷺鳥が存在するならば、その鷺鳥の体内では何が起きているのか。これを科学的に解明しようと試みた人がいた。アメリカの生化学者アイザック・アシモフは、SF雑誌『アスタウンディング』1956年9月号に「金の卵を産む鷺鳥」という短編を発表した。その筋書きはこうである。1955年、テキサスのある農園主が飼っている一羽の鷺鳥が金の卵を産んだ。それを知った農務省は研究チームを立ち上げ、金の卵とそれを産んだ鷺鳥に対する科学調査に乗り出した。その結果、鷺鳥の肝臓の中で酸素18が金197へと転換さ

れるという推論が提示された。

鶯が金の卵を産むという寓話の世界の出来事を科学的に解明しようとしたバカ真面目なところも含めて非常に興味深い発想のあふれるフィクションであるが、特に私が注目したいのは、結局鶯の腹を目の前で裂きひろげることができなかった研究者たちの次の言葉である。「わたしたちは、《金の卵を産む鶯》を殺す勇氣はなかった」。推論を立証し、鶯の体内で金が作られるメカニズムを明らかにするために、鶯の腹の中を直接見て調べるのは絶対欠かせない作業である。しかし、研究者たちは、だった一羽しかいない鶯を解剖することはできなかったのである。この言葉に対する解釈は色々あるだろうが、古代から非難されてきた飼主のためのある種の弁護として受け止めることも可能ではなかろうか。

よく考えてみると、飼主の行動を「欲望」と結び付けて問題とする共通理解の背後には、鶯の腹の中に金の塊なんか詰まっているはずがないという観念が大きく影響しているような気がする。言い換えれば、鶯の腹に金の塊は存在しないと考えるのが常識的で理性的な判断だから、彼の行動は反常識的で反理性的なものになるわけで非難されるべく、彼がそのような行動をとったのはやっぱり欲望に負けたからだ、という論理が、古代から飼主の行動を戒める見方を支えてきたように思うのである。しかし皮肉なことに、欲望を諷刺しながらも、結局毎日一個ずつ金が得られるという、安定した金の入手による幸福追求を正しい選択として奨励している。果たして飼主の行動は、欲望にくらんで犯した反常識的・反理性的なものとして非難ばかりされるべきものなのか、疑問を拭いきれない。

今一度問い直してみよう。鶯の腹の中から金の塊が出てきたとしたら、あるいは金の卵を産む仕掛けが見つかったとしたら、飼主への見方はどうなるだろうか。おそらく鶯を切り裂かせた原因として戒められた「欲望」は、ふと思いついたことをすぐ実行に移した「実践力」として、また勇氣のある行動をもたらした「原動力」として称賛されるかもしれない。